

2. ビオラ協奏曲

端山貢明

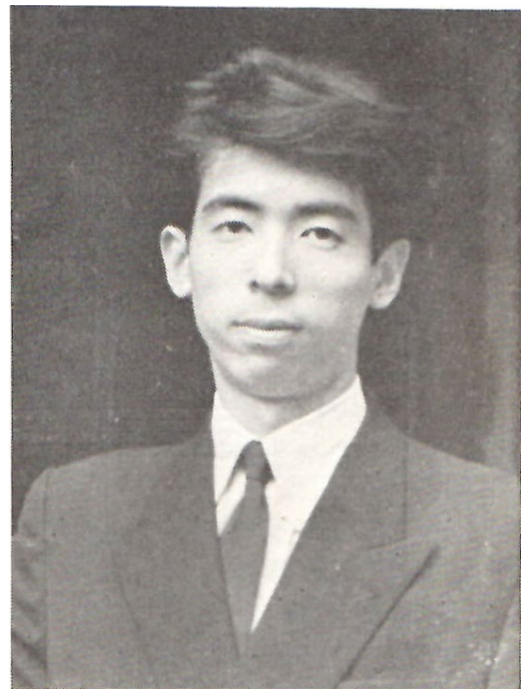
作曲者の言葉

例えば何の為にとか誰々の為にとか云う特殊な意図はこの曲への動機とはなりません。二ヶ月近い期間を創作に向かわせたものは或る力（譬えば物が崩れる時起る様な）への趣好であつたのだと思います。そのため緊張感、迫力の点からヴィオラを決定的に選びました。管楽器の部分ではピアノにあるような、又ピアノでは現し得ない様な打楽器性を抽出することを試みました。私としては初めての大きな、又相当に実験的なこの曲が演奏されるのは大変嬉しい事で演奏の成果が齎す物を期待して居ます。

略歴 昭和七年四月二十八日生。昭和二十七年四月芸術大学入学。現在作曲科に在学中。

〔解説〕

この曲はロンド・ソナタ形式を基調とし其の意義を拡大し乍ら書いて行きました。例えば主要、主題の再帰等はすべて異なる方法によりました。全曲は一楽章で、序奏・カデンツァ・A・B・A'展開部・C・A''・B' A'''・展開部・A''''・コーダの各部分により構成しましたが、劃然とした区切から三楽章のように聴いても差支えありません。序奏に於ては二つの重要な素材を前半は主にリズム、音程関係主要旋律となる音の並び方〔I〕及びこの曲を支配する打楽器を後半では全曲に分散して継ぐものとなる〔II〕を不安定に接触する旋律線と共に提示し副次的な III は II の対旋律として置きました。管弦楽のみによる序奏の後型通りカデンツァが続きロンドの A 部（Moderato）にはあります。簡単な伴奏に支えられ乍らソロが主要主



題（IV）を提示し管弦楽が移調した主題を繰返し低温の反復音にのつた *cresu* がそのまま B 部に継がるようにしました。B 部（Allegro Marciale）では一貫して連続する歩調とソロ部分の音程とリズム（II）が特徴です。弱音から始り楽器と音量を増し乍ら中間部では〔III〕を三回繰返してこの部分のクライマックスを作り、其後は音量楽器を徐々に減じ主要主題



の再帰と共に消え去ります。A は A の正しい再帰では無く倍音列に乗ったグリツサンドの中で遠慮勝に弦のみで何となく展開的な部分にはいります。ここではソロと管弦楽との対話が次第にアルペジオを形作りフーガの様な部分へと導いて行きますが、このアルペジオを支える物は序奏の第二部分の後半と同じ物です。フーガに続いて序奏の第一部分を殆んど変りなく再現し第一の区切 A、B、A'を終わります。C の部分へは ff から弱まるティムパニを橋としました。この部分は常識的な三部形式で、レント、アレグレット再び連とにより構成しました。短い休止の後 A'部 (Allegro Energico) にはいりますが、主要主題の前に暫打楽器のみの部分があります。これは C 部の終りに小太鼓が鳴らした (VI) を 7/4 として受継いだものです。3/4 の休止に続いてソロと管弦楽が形の変った主題の前半を同じく 7/4 の休止に続いてソロと管弦楽が形の変った主題の前半を同じく 7/4 で奏します。〔VII〕後半は A 部の時と同じですが、A' B''' は夫々短縮して展開部に入る様にしました。ここでは序奏の後半の要素を経て A'部のフーガがストレッタ風に二回再帰します。続いて 7/4 の物とによる物とを組合せ乍ら音量を増加させ主題の冒頭部分により展開部を終り急な PP で短い A'部に入ります。この後 V を連続させた様な形でコーダが始り音量を次第に増し乍ら色々な要素を断片的に取扱い終止形は〔VII〕の形により管弦楽、打楽器、ソロを囃合せ乍ら Tutti に由つて全曲を終結させました。全曲に亘り細い細工も施して有ますが聴けば解る様な又埋れて聴え無く成ってしまった様な夫等はこの文中から割愛しました。後に私の様な学生がこの曲を綿密に分析して見て、例えば主題の後半は前半の裏返しだとか C の Thema はその逆行と裏返しだとか〔II〕の要素は全曲に現れるのに幾種類かの変応を伴つて居るとか云つたとしても、それは誤りでない代りにこの曲に取つて夫程、大きな意味を持つて居ません。

(『第 10 回文部省芸術祭交響楽公演』冊子(1955 年)掲載の記事からテキストコード化)

(原文の誤植訂正) べすて → すべて